
この世界を自由きままに

湊戸れう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世界を自由きままに

【Nコード】

N4741N

【作者名】

湊戸れう

【あらすじ】

術と呼ばれる異能力を使って、過去に戦争を繰り返してきた世界。その戦争もようやく締結した、フレニア大陸。戦争が無くなったばかりで、まだ治安の悪い国が存在するフレニア大陸に、遙か東方の国ジパングから、転移門の魔術でこの大陸にやってきた主人公——茅桜 結兎。この大陸を自由きままに適当に旅して、仲間（？）を手に入れ人生を謳歌する。割と軽い物語だったり、シリアスだったり、その辺は作者の気まぐれで進めていきます。残酷な描写は正直あるかわからないので、一応カテに入れておきます。若干エロ要

素を含むかもしれません。※誠に申し訳ございません。うp主がログインパスワードを忘れてしまい、旧IDにログイン不可状態に陥ってしまったため、このIDで更新していきます。旧IDの方にログイン出来た時に、旧IDを削除し、報告を入れますのでご了承ください。><。

主人公、世界観、設定の説明（前書き）

パスワード紛失により、新IDで更新させていただきます。
本当にすいません。

同時期にPCアドレスも変更してしまったため、どうしても出来ません。

お気に入り登録をしてくださった方は、前の作品の方を削除し、こちらの作品に移行してくださると幸いです。

主人公、世界観、設定の説明

ここでは、まず最初に主人公と世界観の説明を致します。

なお、新しい登場人物や国などは登場した際に、新規作成で紹介していきます。

主人公、茅桜^{かやざくら} 結兎^{ゆつと} 16歳

東方にある武術の国ジパングから、転移の魔術でやってきた。武術の国というだけあって、戦闘能力はそれなりに高く、頭の回転も速い。

面倒くさがりやで普段は打算的な行動を取るが、どうしても必要になった時はしっかりと頭を使う。

世界観、設定

この世界では、国同士の戦争は無く、同盟を結んでいる。

しかし、まだ結んだばかりで安定していないため、国内の治安は良くない国が多々ある。

近代的なところがあり、学校があったり、海などの娯楽もあったりする。

フレニア大陸

クロイシア地方（又はクロイシア王国）

最初に主人公が転移してくる地方。南側が海に面している。国とし

ての規模は小さい方。

商業などが活発でそれなりに栄えていて、お金が無く飢餓に困る人はいない。

しかし、国の兵士達が弱小なため、治安はあまり良くない。

裏で奴隷の売買が行われているとか。

メールレア地方（又はメールレア帝国）

クロイシア地方から真っ直ぐ北に行ったところに存在し、フレニア大陸で最も大きく栄えている国。

兵士達は洗練された訓練を受けているため、治安は良い。

さらに、商業や科学なども発達しているため、この大陸では一番安全で快適に暮らせる国と称されている。

魔術

この世界には魔術というものがある。

概念や理論などの一般常識は存在せず、四元素をかたどった魔術もあれば、エスパー的な魔術もある。さらに、詠唱の有無や、魔方阵の有無など、個々により違う点は様々で、どちらかというと異能力と呼んだ方がいいかもしれない。

そういった意味では、魔法と呼べる力。

my act. 1

ここは、遙か東方の秘境と呼ばれている国、ジパング。
そのジパングに存在する小さな洞窟の中に彼——茅桜^{かやざくら}——結兎^{ゆうと}は
いる。

「師匠。ありがとうございました」

目の前の白髪のをもつ60歳ほどの爺さんに向けて、そう言う。

「いったであろう、面倒ゆえに礼などいらぬと」

「まあ、わかってるけどさ。これで最後になりそうだし、素直に受け取ってくれよ」

「一丁前にいいよって……まあ、よい」

師匠に背を向け、彼は歩き出す。

そして、巨大な魔方陣の真ん中に辿り着き、足を止める。

「優子ちゃんに挨拶せずに渡ってよいのか？」

「挨拶ならさっきしたから大丈夫」

相変わらず、女性を口にする時はとことん優しい口調で話す師匠に、呆れを含ませて溜息をわざとついてやる。

それを見た師匠は、こちらを睨んできたが、別に謝る気はないので無視する。

そうすると、師匠も溜息をつく。いつものことだ。

優子は、ぶっちゃけ泣きつかれたが、なんとかあやしてきた。

「それでは、準備はよいな？」

師匠の言葉に頷き、目を閉じる。

すると、魔方阵が突如光を発し、瞬く間に光源に包まれた。

「……………いってきます」

小さく呟いたその声は、誰にも聞こえることなく、光源とともに霧散した。

———そうして彼は転移門を使い、フレニア大陸へと渡ったのであった。

俺には夢が無かった。

あえて言うなら、普通に日常を生きることだろう。

俺の両親は旅好きだった。それも当分の無い旅だ。

転移門と呼ばれる洞窟を使って、人間の記憶にある箇所に転移させる。

これを使って、両親は旅に出た。

ただひとつ問題があるとすれば、この能力は行き専用ということだ。

帰りは転移を使えないし、フレニア大陸には転移門がないため、自力で帰らなくてはならないのが痛い所だ。

こういった理由のため、家には両親がいない。

そのため、幼馴染である優子の両親が面倒を見てくれた。

子供も放って旅に出るとはいかかなものかと思うが、まあ、正直どうでも良かった。

別に寂しくなかったし、それが趣味ならいいんじゃない？　という認識だった。

そうして、約4年近く旅をして、ジパングに帰ってきた両親。

それからは両親と一緒に暮らした。

まあ、それなりに楽しかった。色々な国の話を聞けたから。

これが俺のはじめての夢を持つきっかけだった。

やはり、子は親に似るのだろうか。いつの間にか、俺も旅というものをしたくなった。

しかし、転移門で転移をするには、ある程度の知識や武力を手に入れる必要があった。

それは単純に一人で生きていくためだ。

そのため、必死に勉強や修行をして16歳。

俺は転移門を使い、両親が旅したフレニア大陸を旅する許可を得た。

早速、俺は旅をすることになった。

両親はついていくといったが、俺は遠慮した。

俺が選んで、生きていきたくったからだ。

はじめての夢、ということもあっただろう。

それと、優子も行きたくっていたが、旅の危険や諸事情により見送りになった。

みんなには悪いが、当ての無い旅というのをさせてもらおう。

俺はこれから一人旅をする。このフレニア大陸を自由きままに。

そうして、彼はフレニア大陸に渡ってきた——のだが、

「・・・・・・・・最悪だ。ありえない・・・・・・・・」

辺り一面木々に囲まれている。どうやら、森に転移したようだ。
それはまだいい。そうなることは予想していたし、土地のほとんどは森や海であるのが普通だ。

ただひとつ、結兎^{ゆつと}はとても困っていた。なぜならそれは、

「どうやって町に行けばいいんだ？」

この大陸のある程度の地形は把握していた。クロシアという国に
転移することも。

貨幣価値だって知っている。銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨10
枚で金貨1枚、金貨10枚で金板1枚。

ある程度の食料や武器なども確保している。

今は手ぶらだが、左手の人差し指につけている、青や赤い宝石が
散りばめられた自在の指輪。

これは、簡易独立空間門であり、独立された異空間を生み出し、
小サイズのものなら、その中に収納できるという超便利もの。ちな
みに両親から貰った物だ。

「・・・・・・・・ああ、そうだ、服の替え持ってくるの忘れた・・・・・・・・」

おまけに服の替えも忘れてきたことに気付いた。
自在の指輪で5年間も楽な生活をすごしてきたせいで、感覚が鈍ったのだろう。

5年かけて知識や武術を学んだのに、何でこうなるんだろか。
誰かに確認してもらえばよかった。

「……………くそ、鬱だ……………」

まず、服や宿を手に入れるために、ギルド登録でもしてお金を稼ぐ必要がある。

盗人や山賊にはなりたくない。

まあ、それ以前に町が見当たらないのだが。

「……………はあ、しょうがない。木に登って町でも探すか。めんどくさ」

旅というのは思った以上に辛そうだ。

もちろん、ジパングで練習として多少の旅はしてきた。

しかし、転移して、知らない土地で旅をするのとは全然違う。

「……………この大陸は魔物とか出るらしいからな。注意しないと」

ジパングには存在しなかった魔物という生物が存在している時点で、侮れない旅になりそうだ。

でも、武術も習ったし、魔術も行使できる。

「何とかなるかなあ」

そう眩き、この森の中、一歩を踏み出すのであった。

my act. 1 (後書き)

。とりあえず、前書いたところまではコピペして、がんばります〜；

my act. 2 予想通り

歩き出してから、30分。

さきほど、木に登り周囲を観察したところ、遠くに城下町のようなイメージの町を見つけた。

その方向に歩いていたのだが、やはりなかなか辿り着かないわけだ。

魔物には会わなかったが、残念なことに盗賊のような連中に遭遇した。

「よオ、見られたからにア、ただじゃすませねエゼ」

実にありきたりな台詞を吐いてくる。

人数は5人。一人リーダーのような強面の相当な筋肉をつけたおっさんが、一步も前に出ている。

後ろの四人も、何だか色々と物騒な言葉を吐いてくる。

「……はあ、そりやどうも」

呆れて、うっかり、口に出してしまった。

すると予想通り、前にいるリーダーが、

「あア？ なめた口きいてんじゃねエぞ」

予想通りの言葉が飛んできた。どちらかというと、舐めてるのはそっちだと思っただが。

その言葉を見無視して、彼らの奥にある二台の馬車を凝視する。

よく見ると、そこに一人、あきらかに戦闘には不向きな格好をした太りめの中年がいた。

（あれを護衛してるのか？　でも、こいつら護衛って感じじゃないよな）

まあ、関係ないからいいか。と、そう思っていると、無視していたおっさんが怒り出した。

「無視たァいい度胸してるじゃねエか！　おめエら！　やっちまえ！」

そう怒声を浴びせると、後ろにいた4人のうち、2人が剣をもつて襲いかかってきた。

「はあ」

左右から襲い掛かってくる2人。

相手が剣を振りかぶると同時に、右から来た奴との距離を詰めて、剣を握っている右手の肩に拳底ぶつけて弾く。

「くッ——！」

拳底をくらった奴の身体が崩れた。攻撃のでがかりを攻め、モーションを崩したのだ。

「せあ！」

そのままもう片方の手で顔面を容赦無く殴り、吹っ飛ばす。こっちに寄ってきたもう一人も、先に距離を詰めて足を払う。

あっけなく倒れたそいつの鳩尾に、同じように思いっきり拳底を

当てる。

かはッ、と呻き声を漏らし、その痛みに地面をのたうち回っている。

「な、なんなんだテメエ！」

「何なんだって言われても……」

お約束通りの言葉しか言わない彼らに、いい加減飽きてきた結^ゆ鬼^う。

「こ、こうなったら、オメエら！ 一斉に魔術あてんぞ！」

そういい、3人は手を真上に上げた。

すると、手の上には炎の球体が螺旋を描きながら現れた。

「火球の魔術か。まあまあだね」

相変わらず覇気の無い気だるげな表情を見た三人は、一抹の恐怖心を覚えた。

「かまうな！ ぶッ殺せ！」

リーダーの大声で、拭いきれない恐怖を押し殺して、火球を放ってくる。

すかさず、彼は、

「目には目を魔術には魔術を、ってね」

そう言い放つと、急に右手が発光し、青白いプラズマのような光に包まれた。

視認できたのはそこまで。飛んでくる3つの火球が標的へ一直線に飛び、着弾した。

着弾と同時に響き渡る轟音。地面を穿ち、辺りの草や木に、火が燃え移っている。

パチパチ、と燃える火の音が、場を支配する。

「や、殺^やったか？」

したっぱの一人が生唾を飲みこんで、そう言う。
しばらくして、気持ちの整理がついた頃。ようやく、緊張が解けた3人に、安堵が生まれた。

そして、リーダーが口にした瞬間、

「……は、はッ、たいしたこと――」

「うん？ 何だって？」

背後から、弾みのいい笑いを含んだ声が聞こえた。

「て、テメェ!？」

そう言って、後ろを振り向こうとするが、そうはさせない。
半回転したところで、わき腹を思いつきり殴る。

思いつきり吹っ飛ばされ、苦しそうに呻いている。

「・・・・・・・・く、そ！ テメエ、なにモンだ・・・・・・・・！」

わき腹を押さえ、こちらを睨んでそう言ったが、すぐにその顔は驚きの表情に変わる。

「・・・・・・・・て、テメエ・・・・・・・・何だ、ソレ・・・・・・・・」

そいつが見たものとは、雷を纏っている結^{ゆうと}の姿だった。

雷というより、電気に近いかもしれない。

ところどころ、バチバチ、と電気が漏れ出している。

包むようにではなく、高威力の静電気のように帯雷している。

黒髪で黒い瞳だった、薄いイメージは青白い光を発した事で、ものの凄く勇ましく見えた。

「悪いけど、気絶してもらおうよ」

彼は、一瞬で倒れていたリーダーの元へと移動した。

文字通り一瞬だ。唯一見えたのは、彼の軌道に流れた電気、それだけ。

これは瞬^{しゅんしょう}消と呼ばれる現象。

一瞬で消える、ではなく一瞬消えたように見える、という意味からジパングで付けられた名称だ。

そして、彼は右腕で拳底の形をつくり、

「——ナム・ドウルツク・ユル
蒼雷の舞龍」

雷の纏った右腕を思いつき腹へと叩き込んだ。

下が地面だったため、殴った衝撃がそのまま直撃し、痛みに声を上げ気絶した。

「ふう……その二人も闘^やる？」

その言葉を聞き、2人は腰を抜かしながらも、おぼつかない足取りで走っていた。

「さて、向こうの馬車に行ってみるかあ。ついでに、乗せてもらう」

そう言い、奥にある二台の馬車の方へ歩いていく。

向こうにいる、太った中年はこちらに気付いたようだ。

焦った表情を浮かべ、急いで馬車を進めようとしている。

だが、そうはさせない。

彼は瞬^{しゅん}消^{しょう}を使って、一気に中年の元へと駆ける。

「やっと人を見つけたんだから逃がしてたまるか！」

my act. 3 旅の災難、事実

中年は馬車を進めようとする。

しかし、この距離では魔術の速度には勝てない。

馬車が発進する前に、進行方向へ立ちふさがった結兎^{ゆうと}。

「えーっと、すみません」

相変わらず焦った声を上げているが、それを無視して声をかけた。

「は、はいっ!？　．．．．．な、何か用でも？」

未だに焦っている中年を見ると、軽く腹が立ってくる。

その感情を流して、ひとつの疑問を浮かべる。

「後ろの馬車はいいんですか？」

馬車が二台あるのに、ここには中年しかない。

なぜか、後ろの馬車の手綱を持つ人がいないのだ。

「は、はい．．．．．後ろのは必要ないんです．．．．．」

先ほどの連中とグループなのは間違いない。

俺が5人を軽々と倒したから、片方の馬車は諦め早々に逃げようとしているわけだ。

普通に考えれば、商人と、それを護衛する傭兵、というのが妥当だろう。普通なら、だが。

「さっきの連中、とても傭兵には見えないんですけど？」

ニヤリ、と確信を得た表情で嘲笑う。

間違いない、俺はすべて知っているぞ？、と言っているように聞こえるだろう。

その笑みを見た商人らしき人は、突如懷からナイフを取りだし、手を震わせながら彼に突き刺そうとする。

しかし、軽く身体をそらしてナイフをかわし、手を捻り上げる。

「まったく、物騒でしょうが」

この行動に少し腹が立った彼は、中年を思いっきり睨んでやる。
あくまで知的な冷静さは残して、だが。

「ひい！？ す、すみません！ お許しください！ 何でもしますから！」

「じゃあ、馬車には何を積んでる？ 全部言わなければ殺す」

ありったけの殺気を込めて言い放つ。

が、殺す気など毛頭ない。彼はまだ人を殺したことはないから。

「か、金と奴隷です！」

「奴隷？」

ふと、ジパングでは聞くことのない言葉を聞いた。

「は、はい！ 良かったら差し上げます！」

別に欲しくなど無い。

第一、彼は一人旅をしているのだ。

奴隷を譲り受けても正直困る。

だが、興味はあった。興味というより、その奴隷という子に対する同情だ。

「ちょっと、見せてくれる？」

そう言うと、「はい」と声を震わせながら返事をして、馬を降り、その馬車を扉を開けた。

「こ、こちらです………」

顔を除かせ、中を除いてみる。

中には一人の女性が座っていた。

宝石を埋め込んだかのような琥珀色の瞳が、こちらを捉える。

文句無しに美しいといえた。

そして、美しいのは瞳だけではない。

顔のパーツも一つ一つが、これ以上ないくらいに綺麗に整っている。

青く透き通った水色の長い髪も、色彩豊かに彼女を際立たせてくれる。

白と青のツートンカラーのワンピースのようなドレスを着こなしている。

どれも現実離れしすぎている。

しかし、その表情は絶望極まりなかった。

人生を諦めているかのような瞳が、こちらを捕らえ続ける。

黙ったまま、ずっとこちらを見続ける。

「商人さん。この人は何をする奴隷なんだ？」

「性処理です」

まさかとは思ったが、その予感は的中した。

彼女の表情を見ればわかる。

何かしらの理由があって、無理矢理奴隷にされたのだろう。

絶望を抱く彼女の表情に対し、生きるために、相手に媚を売りへらへらと笑いかけてくる商人。

その商人の顔を見て、腹立たしさが湧き上がってくる。

戦争が終わったというのに、まだそんなことをしているのか。

「ふざけんな！」

衝動的に、その商人の顔面を手加減無しに殴る。

さらに、もう片方の手で服を掴んでこちらへと引っ張る。

そして、殴った手で今度は首の後ろを手刀で叩き、気絶させる。

怒り狂いながらも、流れる動作で瞬く間に、一人を戦闘不能にする。

「……くそ、最悪だよ、ほんと」

旅をするのが夢だった。

俺は旅というものに憧れや希望を抱いていたのだ。

だが、その思いは初日で崩されることになった。

何が旅だ。何がフレニア大陸だ。

世界を見て色々なことを学ぶ予定だった。

両親に聞かされた旅の内容は、所詮良かった部分だけを話したに過ぎないのだ。

わかってはいたが、ここまでひどいとは思っていなかった。

「旅をするってこういうことなのかな」

そう口にすると、とことん悲しくなってくる。

だが、今はそんなことをしている場合ではない。

湧き出る色々な感情を、とりあえず押さえ込む。

そして、彼は後ろにある馬車の方へ向かい、扉を開ける。

商人が言ったとおり、この馬車には金板が積んであった。

一見するだけでも、30枚はくだらない。

「自在輪じざいりん」

左手を金板の上に置き、そう呟く。

すると、人差し指の指輪が発光し、10枚の金板を残し、それ以外すべて消えた。

指輪の独立空間に転移させたのだ。これで簡単に保管できる。

残りの10枚を手を持ち、前の馬車へと移動する。

「金板っていうから、金塊みたいにデカいのかと思ったら薄っぺらいんだなあ」

そんなことを呟き、相変わらず座っている女性に目を向けるのだ。
った。

my act. 3 旅の災難、事実（後書き）

前書きとは後書きとか少なくてすいません＞＜。

コピペ終わり次第、書いていこうかと思ってます。

my act. 4 小さな誓いから

結兎^{ゆうと}は彼女を凝視している。

彼女も結兎を凝視している。

しばらく、お互いの視線がぶつかりあった。

先ほどの表情と比べると、今は絶望ではなく、彼に対する不安に変わっている。

そのため、さっきよりもさらに綺麗に見えた。

そんなことを考えているととうとう女性が折れた。

「・・・・・・・・何か？」

不真面目な声色で、それだけ言った。

明らかに、奴隷という身分に反抗しているのが見てわかる。

「馬は引ける？」

取り合えず彼は、近辺の町に行くため、この馬車を使うことを考えた。

「ええ、それなりには」

「じゃあさ、町まで連れてってくれない？ 町まで着いたら金板10枚あげるから、あとは好きにしていよいよ」

彼は馬は扱えないため、彼女に連れて行ってもらおうという考えだ。ついでに、町で別れてから餓死されては困るので、金板10枚を

渡せば未然に防げる。

ただまあ、そのお金が賊の盗品である可能性は否めないが、この
際文句は言っていられない。

どうせ、あんなところに放置しておけば、他の誰かが見つけて持
っていくだろう。

だったら、自分が貰っても大丈夫だろうという浅はかな考えを肯
定する。

「・・・・・・・・え？」

しかし、好条件な頼みを提案したはずが、啞然とした表情で、啞
然とした答えが返ってきた。

その仕草が悶絶するくらい可愛かったが、必死に堪えた。

「あれ、だめ？」

「わ、わかました」

断られたら、道だけ聞いて金板渡そうとしたが、なんとかOKし
てもらえたことに安堵する。

「・・・・・・・・あの、お名前聞いても？」

おっと、向こうから話しかけてくれるとは思わなかった。

「ああ、えっと、ユウトⅡカヤザクラかな」

ジパングとは違ってが違うため、戸惑いながらも自己紹介する。

相手からすれば、ジパング出身である彼の名前は異質に見えるのが当然だろう。

しかし、彼女は何の関心も抱くことなく、

「ユート、ね……私はセリスⅡロードランページ」

と言ったことに、彼女個人の観点ゆえなのか、それともこの大陸の認識自体がそうなのか疑問に思いながらも、睡魔に襲われたためとりあえず忘れる。

「セリスね。んじゃ、町までよろしく。俺は寝るから」

そう告げて、横たわって目を閉じる。

セリスは相槌をうつて、馬をひきにいった。

俺の旅は、開始から一日足らずで現実に直面した。

父さんと母さんからは、ジパングと比べればフレニア大陸は技術や武芸、治安などがあらゆる面で劣っていると聞いていたから、覚悟はしていた。

でも、いざ現実に直面するとなると、抱えきれない感情がこみ上げてくる。

まあ、思わぬところで収入があったのは、僥倖だったな。

金板20枚あれば、しばらくはのんびりしてても暮らせると思う。

そういうえば、セリスはこれからどうするんだろうなあ。

行く当てがあるといいんだけど。

あの雰囲気からすれば、無理矢理奴隷にされたのだろう。

本人が自主的に奴隷になったようには見えなかった。

例えば、家族が貧乏で自分が売られるしかなかったとか。
いや待て。そもそも、食い繋ぐことすら出来ない家族はこの大陸に
いるのか？

——多分いるだろうな。

フレニア大陸で一番活発なメルレア帝国では、治安は良く、飢えに苦しむ者も存在せず、奴隷の売買も嚴重に取り締まっていると聞いている。

そこに移住する事が可能であるにもかかわらず、奴隷にされる者がいたとすれば間違いなく不幸な家族はある。

大体、ポジティブな思考を回転させていたが、世界の皆が何一つ不自由無く生活するのは不可能だ。

例えば、魔族。

ゴブリンやオークなどの低脳な奴は人を襲うため人権無視するとして、魔族にも頭が賢く温厚な一族はいくらでもいる。

にもかかわらず、そこに存在するというだけで、差別され、退治しに来る者がいるという。

ああ、そう考えると泣けてきたよ。

ジパングがどれだけ恵まれていることか。

ジパングには、“魔法具”と言われる、魔力の宿った武器を生み出す職人がいる。

これは、フレニア大陸では実現不可能なオーバーテクノロジーだ。

他にも、ジパングは、この大陸とは違い時代が進歩している。

奴隷などの差別化を加え、先ほどの魔法具などの技術力などの進

歩。

それゆえに発生する、暮らしの安全化。

社会や、技術力が進歩することで、職を選ぶことが出来、学校を設立し、有能な人材を育てることができる。

結果的に、善の円環的連鎖を生む。

俺の家庭だって、例外ではない。

両親は見知らぬ土地に旅に出られるほどの余裕があり、尚且つ、それでも俺は親戚の優子の家に世話になって、満足のいく生活を送ることができる。

まあ、優子から逃げるために、旅に出たというのも2割ほどマジだが……。

今この大陸、あるいは世界のどこかで、不自由を強制され、見知らぬ人間に無理を強いられ、あまつさえは、男の慰み者にされる。そんな不幸な人間はいくらでもいるだろう。

でも、残念ながら、その悪をすべて断ち切れるような力を俺は持っていない。

セリスのように、手の届く範囲では救助できるが、世界の反対側で起こっていても救助は不可能だ。

考えても仕様の無いことではある。考えないのが一番であることも理解できる。

だから、俺は見てみぬ振りをするしかない。

俺はただの冒険者なんだから、世界を救うなんてぬるいことは出来ない。

でも誓おう。

せめて、この手で守れる範囲では頑張ってみよう、と。
まだ旅は始まったばかり。

きつと良いことあるよな、うん。

・
・
・
・
・

誰かに呼ばれている気がする。

ああ、そっか俺寝てるんだ。

ってことか、起こしてるのはセリスかな。

幾度も体をゆすってくる。

はいはい、今起きますよっと。

my act. 5 セリスⅡロードランページ

View セリス

現実味を帯びないまま、ユートという少年に頼まれ、馬車の手綱を任された。

年齢は、おそらく私より下だろう。

私が18だから、彼は多分16、7くらいだと思う。

漆黒の憂いを帯びた黒髪に、これまた漆黒の深海の如く深い黒い瞳。

黒髪で黒眼の人間は初めてみた。

少なくとも、私に害のなすことはしないだろう。

奴隷商人と盗賊を退治したあの時。

彼は奴隷商人の、奴隷の扱いを聞いた時、“性処理”という単語に、底の無い深い激情とともに、商人を殴り、手刀を当て気絶させた。

わざわざ、首を狙ったあたり理性は残っていると思われたが、ギリギリ我慢できただけだろう。

あと少しでも、商人が余計な事を口走っていたら、間違いなく首が飛んでいたと思われる。

最初は恐ろしい少年だと思った。

その場にいた全員は殺さずに、気絶させていた。

しかし、彼が殺人行為に対し、抵抗はあれど、可能としていることは、何より目が語っていた。

それから、後ろの馬車で、何かしているかと思えば、金板10枚で、近辺の町まで馬を操ってほしいと言われた。

金板10枚も支払って、町まで案内する理由がわからなかったが、しばらく思考に耽っていると理解できた。

おそらく、私に氣を使っているのだろう。

飢え死にしないように、わざと金板10枚を渡そうとしているのだと思う。

かといって、他人にいきなり金を渡されて受け取るような人間じゃないと把握し、町までの案内を担うという適当な依頼を受けさせたということだ。

正直、わけがわからない。

黒髪黒眼で少年で、相当な強さをもっている。

そのくせ、認めたくは無いが、奴隷という身分の私を保護し、金貨まで渡そうとしている。

何が目的なのか理解できなかった。

助けてくれたからといって、そう簡単に信頼はおけない。

私は生まれてから一度も大切にされた覚えがない。

それこそ、盗賊に襲われていても放置されるような存在だ。

ゆえに、そう簡単に人を信頼することは出来ない。

と、そうこう考えているうちに、町の目の前に着いた。

とりあえず、少年を起こそうと思い、馬車を止め、後ろの扉を開けた。

ユートはまだ寝ていた。

出来れば近づきたくはなかったが、そうも言っていられないため、妥協することにした。

「あの、着きました」

声をかけるが、ちっとも反応しない。

「着きましたよー？」

びくともしないため、もう少し近づいてみる。

ユートの目の前まで寄って、もう一度声をかけるが、それでも反応しない。

「すいませーん、着きましたー」

軽く寝息を立てながら、だらなく無防備な顔を見ると、つい語尾が弾んでしまう。

知らずのうちに自らの顔も綻んでいる。

今度は、肩をゆすりながら、声をかけてみる。

先ほどのような警戒心も、知らずのうちに薄れている。

「町の目の前まで着きましたので、起きてくださーい」

微笑を浮かべながらも、彼を起こそうとするが、まったく起きない。

ここでようやく、自分が笑っていることに気付いた。

「……………」

何故だろう。

さきほどまで、警戒心を張り巡らせていたのだが、今はそんな気

にはなれない。

でも、不思議と悪くはない。

笑ったのは久しぶりだ。

自分が今という時間を楽しんでいることに気付き、嬉しくなる

こんな気持ちになったのはいつ以来だろうか。

もう何年も笑顔という表情をしていなかったため、もう忘れていると思っていたのだが。

そういったことを考えていると、自分は今充実しているんだと実感できる。

「・・・・・・・・すう・・・・・・・・すう・・・・・・・・」

相も変わらず、寝ている彼の顔のほっぺをなんとなく突いてみる。これには反応し、彼は顔を左右に振ったり、声に出してうっとうしそうにしている。

その声がどうしようもなく、卑猥に聞こえ、やや赤面してしまったのは気にしないことにする。

そんなことをしながら、撫でたり、つねったりしていると、不意に、彼の頬に涙がつった。

「・・・・・・・・え？」

理解できなかった私は、どうしていいかわからず、固まってしまった。

一滴のみの涙はすぐに治まり、今度は決意に満ちた表情をしたような気がした。

彼にも色々事情があるのだろう。

何だか、少しだけ彼の性格がわかった気がする。

少なくとも、その一滴の涙にただならぬ決意が込められていることは感覚的に理解した。

だったら、私は……

View ゆうと 結兎

まったく、変な事考えてたな。

考えてもしようがないことを考えると、少しは変わったのかな。まあ、いいか。損は無いし。

そうして、ふと目をあける。

「あ、こんにちわ」

「……あ、ども」

蒼い長髪に琥珀色の瞳をもつ女性がこちらを覗き込んでいた。

「ああ、セリスか」

寝起きの目を擦ってみるとセリスだったことに気がついたのだが、

「何で膝枕？」

「あら、いけませんか？」

「……いや、いけないとかじゃなくて」

「あなた様の決意を胸に、私も一步踏み出してみようかと思いついて」

何なんだ一体。俺が寝ている間に何があったんだ。
なんか、ちょっと口調変わった気がするし。

そんな彼の考えはお構いなしに、こっちに笑顔を振りまいてくる
セリス。

本能が告げている気がする。
これは早々に逃げるべきだ。

「まあいいや。その馬車あげるよ、あと、これ金板ね」

そういい、さっさと馬車と金板を渡す。

「それじゃ、またどこかで会えたらよろしく」

早々に退散しようと、町に踏み出す彼だった。

人物紹介“セリス”、設定e t c. . . (前書き)

これでコピペ部分は終わりです！

人物紹介“セリス”、設定e t c. . .

セリスⅡロードランページ 18歳 女

腰まで伸びた青色の艶美な髪に、琥珀色の瞳をした女性。スタイルは抜群。

結兎に救われて、主従に近い関係になり敬語で話すようになったが、元来気の強い性格のため、気に入らない者を相手にする場合は普段通りドライで、礼儀のない口調で話す。

結兎に好感を抱いている。

主人公、茅桜^{かやざくら} 結兎^{ゆうと} 16歳 男

東方にある武術の国ジパングから、転移の魔術でやってきた。

武術の国というだけあって、戦闘能力は高く、頭の回転も速い。

面倒くさがりやで普段は打算的な行動を取るが、どうしても必要になった時は頭を使う。

一般人とはやや変わった思考しており（変人的な意味で）、そのことを自分でも理解している。

保持魔術は、蒼雷^{ナム・ドウルツク・ユル}の舞竜という超能魔術。

優子

詳細不明。

超能魔術

魔術の行使形態を示す。

超能力に近い魔術のことで、詠唱などの概念が存在しない魔術のこと。

詠唱を必要としないため瞬発力に長けるが、大規模な攻撃を出来ないのが欠点。

超能魔術を保持する者は、皆必ずそれぞれ一種類の技しか持っていないが、それなりに応用が効く。

純唱魔術

魔術の行使形態の一つ。

詠唱を必要とする、最も魔術らしい概念をもつ魔術。

超能魔術とは違い、様々な魔術を発動できる。故に応用も効く。

my act. 6 一人旅、のはずが。(前書き)

遅れてすいません＞＜。

この時期は中々忙しくて・・・。

my act. 6 一人旅、のはずが。

門番^{うと}をしている兵士二人に軽く会釈をして、町の中に入ってく結^ゆ兔^と。

その景色はジパングとは一味違った風景だった。

レンガ造りの建物がずらりと並んでいて、一軒ごとの高さもジパングと比べると高い。

普通ならここで軽く感嘆するべきなんだろうが――

「……セリス、何してんの？」

「ユート様の斜め後ろを歩行しています」

実はさっきから、彼の後ろをセリスが着いてくるのだ。超近距離のストーカーと言ってもいいかもしれない。

何も言わずに、ただ笑みを浮かべてついてくる。

時々振りむいてセリスを見るが、ここでも3割増しの笑みを返される。

さっきの言葉は、自分なりに勇気をしぼったの言葉だったのだが、どうしようもなくやるせない感情に駆られた。

「……困るんだけど」

すぐ後ろでストーカーされては取り繕い様がない。
はつきりいってうざい。

唯一の助けは彼女が超絶な美人だったというところだろう。

「何故でしょうか？」

至極真面目にそう返答してくる。

「はあ、もういいや」

確信的なのか、天然なのかは不明だが、当たり前のようにそう返答されると色々ともうでもよくなってくるのが彼の性格だ。

彼に直接害があるわけではないので良しとしよう。

「日も暮れてきたので、宿を取りましょう。私にお任せください。近辺の地理は把握していますので」

と、諦めた矢先、今度はそんな事を言ってくる。

「いやいや、宿はいいから。それよりも、一体全体なんでついて来るわけ？」

一度は諦めた結兎だが、さも仲間のように言うので流石に無視出来ずに言い返してしまう。

「失礼しました、それでは、町外で野営の準備を致しましょう」

ここまでくれば、間違いなく確信犯と言えよう。

話術の心得などまったくくない彼は、彼女の巧みなのか疑わしい話術に飲み込まれていく。

「野営なんてしないから。つか、勝手に話進めないでくれ……」

「いかなさいました？」

「はっきり言うと、ついてくるな」

泥沼に足をつっ込んだ状態を打破する方法など見つからず、思い切って思考を投げ出し直球で勝負を挑むが、

「嫌です」

同じように直球で返された。

「来るな」

もう一度直球で返す。

「嫌です」

その後もしばらく直球を投げ合ったが、決着が着かなかったため結鬼が折れて、とりあえず宿で詳しい話をするようになった。

セリスに聞いてみたところ、ここはクロイシア王国の城下町らしい。

行く当てはないので正直どうでもいいのだが、もう一つ、結鬼を驚かせる話を聞いた。

彼らは一部屋銀貨40枚の宿を二部屋取った。現在、彼は金板20枚、彼女が金板10枚を持っている状態で、それぞれ銀貨2000枚と10000枚ということになる。

そして曰く、この宿は城下町では4番目に値段の高い宿だと。
その宿で一泊の宿泊費が銀貨40枚、そして現在、彼は銀貨2000枚を所持している。

初めて、自分が恐ろしい額のお金を手にしていることを理解した時だった。

盗賊から、頂戴したのが唯一の救いだろうか。

禁止されている奴隷商人の馬車を護衛していたのだから、間違いなく悪人だと彼女が言っていた。

悪い事はしていない、と思う。

「で、だ」

これといって主張の無い、抑揚を抑えた声で淡々と言う。

「はい」

これに対し、彼女も同じように淡々と返事する。

「なんで俺についてくるのか教えてくれ」

それは、今現在彼が一番知りたい内容だ。

事と次第によっては・・・などということは無いが、一人旅をする予定が救出した見知らぬ美女に斜め後ろの位置を支配され、付かず離れずついて来られるとそれはもう精神的に参ってくる。

「ユート様に同行したいからでございます」

ちゃっかり、ユート様などと呼ばれてその場に居づらい心情にされたが、いちいち指摘しては話が進まないなのでこの場は我慢す

ることにする。

「なんで？」

「有体に言えば行く所が無いからです」

「いや。金板あげたでしょ」

「残念ながら私には武術や魔術の心得は持っておりません。そのため、一人で行動するには無理があります。最悪襲われかねません」

「じゃあ、仲間見つけるか、金で雇ったら？」

「それも不可能です」

「え、なんで？」

「それは、私の一族が魔女と呼ばれている事にあります」

彼女の言葉を聞き流す意気込みで聞いてい結兎だが、不意に魔女という言葉に耳を傾げた。

「魔女？ それ何なの？」

「端的に言えば、魔族と人族のハーフ、でしょうか」

「………魔族って魔物のこと？」

「いえ、それとは異なります。彼ら程の阿呆ではございません。言うならば、魔物と似た血を持つ人間といったところででしょうか」

この世で一番魔物に近い存在ではあるが、人の形をしていて、魔力も保持しているため、魔物とは別の存在である。

「うーん、つまり、魔物の血を持った人間と普通の人間のハーフってことか。わかりづらいな」

「そういうことになりますね。ちなみに余談ですが女性が生まれやすい家計です」

彼女の言った余談に相槌を打つ。

「で、そのハーフのどこがいけないわけ？」

とは言ったものの、ある程度の予想はついていた。

ジパングでも類似する差別はあったからだ。

まあ、魔物や魔族といった別種の人間は居なかったが。

「おそらくご想像なさっている通りです。人族は、魔族や獣人族を極端に毛嫌いしています。そのため、私のような魔族の血を宿す者は、敬遠どころか処刑される可能性もございます」

獣人族なんて初めて聞いた言葉だ。

この大陸にはそんな種族まで存在するのか。

彼がいかに、両親から聞いた話が一部であったのかを思い知った。

「戦争の終結は所詮上辺だけってことか」

「同様に魔族も人族を毛嫌いしております。結果的に異種との混血の家計は滅多に存在しません」

「そしてここからが本題です。そして私の望みでもあります」

ここまではあくまで前置きだったのか。

長い話を聞くのが苦手な彼にとっては、とても小規模な苦痛だった。

それと同時に、ようやく彼女の望みが聞けることに安堵もした。

「私の望みは、ユート様の行き先に同行させてもらうことです」

先ほどより真剣な表情が彼の瞳を捉える。

彼は彼女の覚悟のような意思に圧倒され、そしてその美しい美貌に一瞬とはいえ目を奪われた。

しかし、よく考えてみると、

「さっきと一緒じゃねえか！」

「まあ、そうともおっしゃいます」

おっしゃいます、じゃねえよ。

my act. 6 一人旅、のはずが。（後書き）

中々うまく書けませんねー。

まあ、この作品は僕の執筆の練習のために始めたものですので。
どうかご勘弁を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4741n/>

この世界を自由きままに

2010年10月9日14時37分発行